

櫻水先生隨筆卷之十



大槻文庫

○消遣隨筆

公事と職業と又つちて戸出まのりか秋舎うまあれハ
夜更とかく書高下抄あもり中吐う志す初の一玉
く乃婦云とゆ公もとく又ハあれと又折くを座大
和の書と讀するもあはる多敷くのやハ未
く知らずと久しく疑に積るるやかと怪懐
所ぬると多し又ハか入る他の人々と對して
あくの談話をやあまの我まは怪ひるや
まもむるよめ抄のりはあはる色紙一のよめ
可一序の老の身の折るや此時ハ好ましく自ら思

ひかた、感念せるより、何れ多う、
世より書評せる古序の人々の嘉言善行等、
あり、徹庵より、撃斎等、をう、の華おんと
あり、これり、
これより、己の雑記の脱記、
任せる、著者、
拙をより、
（中）は、
は、
とい、
まを、
並すも、

の、
とく、
あり、
覚、
の、
後、
と、
す、
見、
漫、
中、

後一何日の属の回録ありありといく度と
もあく位而を替へたれ、其地在りて、
鑑澗巷漫録、榭庵漫録、と題するの教書あり、又一
編の書とも成せるもの、慎初録、養才活法、病氣三不
活醒世、海心、忘語、活外、科、鏡、菟、伎、能、長、技、の、前、後
二冊、東、輿、地、名、考、榭、庵、餘、材、微、素、錄、清、日、贗、言、榭、庵、雜
志、蘭、瘦、隨、筆、聞、見、劄、記、震、雷、錄、考、字、考、の、記、尋、常、名
篇、低、事、志、の、考、の、記、の、記、此、錄、記、の、諸、編、漂、流、入
字、言、學、若、千、卷、あり、格、お、漫、録、料、に、て、中、編、の
形、と、ち、め、白、も、及、さ、る、の、袋、も、亦、め、い、く、つ
よ、め、く、あ、ぬ、但、あ、り、い、く、い、ひ、ま、れ、
教、十、卷、及、の、著、書、の、と、く、出、れ、と、い、つ、き、

よく撰、ま、し、け、か、取、り、盡、く、も、あ、り、ぬ、の、ま、り、と、し、
さ、ま、ど、お、り、ま、く、り、な、れ、片、の、老、鍊、の、名、白、し、か、き、
よ、め、あ、り、さ、ら、に、れ、は、ま、り、校、正、増、減、を、も、か、
か、は、後、の、い、ひ、傳、り、あ、る、も、あ、る、(き、ま、や、さ、れ、と、
老、う、身、の、氣、力、も、ま、り、く、あ、り、ぬ、は、た、く、籍、助、あり、
そ、思、ひ、の、ま、り、元、來、こ、後、の、お、り、は、雜、稿、と、い、
も、み、り、人、の、あ、り、と、あ、れ、我、の、こ、れ、と、記、し、て、
其、時、の、備、忘、と、あ、り、ま、り、あ、り、初、め、は、ま、り、至、
る、以、ち、又、別、な、片、一、帖、を、作、り、片、の、後、く、布、
ある、限、見、え、る、は、ぬ、れ、何、の、い、ふ、思、ひ、を、記、す、
と、い、ふ、書、又、他、の、七、み、た、り、の、書、と、い、ふ、め、い、と、い、ふ、あ、り、
これ、の、亦、覆、寫、の、具、ある、し、時、文化、の、了、本、卦、の、

この川ありよく似通ひしるるあり とい説は如是釈解
の見

○ 林信篤春常先生を信敬せる一諸侯あり 元録西

○ 徳の以てあり あり日先生折延きて款待す先生

○ 歳老て壯健あり 侯爵此は元背を拊して曰膚理

○ 潤澤饗饌あり 老翁や 弟一善の守を盡す上候

○ 請ふと昂先生差て唯比丘阿常よりありとやされ

○ 一とあり あり中候あり 比丘尼ありて 湯所賣治

○ の流あり ありとれあり 時より言ふ 惣て好色を比丘

○ 好してひいしとぞしうと 惣て好する百と興死民

○ 間も玉門候びくといふ何より 得れといふ子候知

○ りをその中 考吾河稱をも 推し 少やを悪少年

○ のされ相あり 右の説よりれ 比丘ハ 女人相指し

○ ありとあり 天轉し 元都下當時の流あり 因りしあり

○ 字ありあり 翁都下 ありとあり 比丘尼の

○ 賣や新方橋の向又 湯所 今都下 昔の香ありあり

○ 中等の著時の名あり ありとあり 疑ひ解する

○ がとし 此れあり ありとあり 世の縁あり 代り

○ 正法あり 日と又通し ありとあり 思ひし 早言の解

○ 左ありあり

○ 肥後 秋山 玉山 候あり 門 見録あり 此の言あり 古く書候

○ 續を以て著あり 眼刻は刻心刻す人 是候三刻とあり 世

○ ありあり 手刻を加へ ありとあり 心は眼の

○ 三ツのありあり 皆を盡し 属す 手写抄あり ありあり

此の終身忘るは実の年毎の功の係り正しく
 予この意は友人讀書不如字也 翰林玉藻は凡一
 と此のいへり と覚る 此れを記し亦社也兄弟
 子ゆ若魚ととも茂算知ありし時法唐先生示
 されしハ油多阿善せよ但善也阿好すす隣華
 此れより此れを以て手宮抄録此書と奉りまめ
 る昔よ我若うりし時善鈍く書隣くして字とめ
 書とめたりと思ひし物若好書と云ふりしと此
 抄せしハ序の故も遠恨ありき多此れありし
 中これより此れ阿服膺して序の意す但書付
 能せず私藩の文例の懸せは跡漫抄の所の者毎
 仙臺と七小出と仰いりたりとクジヤウ抄録といひ



以何のいひれを知らずりしと近頃書序人より
 之垂のりは何事波是と苦状をヤせしなりといひ
 や此の初は初くの文意を誤り家のをよじ書義を
 白し毛崎朝のや仙臺封内をいひりたり初は
 ナカレをを忘りしと下をす自といひりたり 毛
 東西隔絶の地也れとも古多の事ありとも 毛
 カツパ 命相今の世も兩存をいひありしとカツパ南
 帝海上の存あり 南帝とは波布杜危見 伊斯把泥
 亜の二國よりして中國人天西慶長の以りありは渡来
 せし也 其國乃諸島中邦より傳へり片も抄りて 帝法
 のとくを皇たるもの多しロイトロヒリウスアルヘイ
 ホテンの教教するといふと毎ありはカツパも多し



其袴衣ホルトカルの袴はカツパといふ昔秋俗
其製す劔の雨衣を作り今製を凡るは片依
まニルカツパといふ物のまじくありしむかひの
おしく異也これと身を披きて前襟ありておたこ
といふ物をもて衣衣を鎖す質掛はホルトカルの袴向の
へ其さけ長くして地を曳くを三四尺も曳けり本
師より以下其等侯の者中より其さけの長短
あり本師の着白而特は長くして地を曳くす
教尺侍者してこれをさけりゆめくゆく也といふ婦
質掛は支倉のお和門の被地は好く帰れりルリチチ
とゆいひの質掛はさけりハ袴多敷袴は袴好ありさけり
所謂カツパありて又掛は片の袴衣のまじりて被地
方の礼服とありしと思ひし袴衣はこれといふ所の
猪衣の袴服は綴ありとさけり今片の袴衣は袴衣
眼おの礼服とありし袴衣は綴ありとさけり今片の袴衣は袴衣

○ケントニ茶屋といふもの、寛文の頃の繪に見ゆ寛永
の頃より始りしりや途やも飲食調一ち所あり
中文家現頼ありて頼は増頼齋食所也又野也又
食一次也
階書場帝紀毎之一所軒教道置頼史記王葛傳三日三
夜不頓舎云々食事調ル所ナリケントニ飲食の事
と看すま現は其まは在りあり用をて指お
するまはまはまは現在するなまケント茶やと
いひしと思ひるむり茶屋といふは茶本賣茶
まは片の茶屋のまはまはまはまはまはまはまは
一係禪園の地より茶屋ありて茶本賣の賣の
茶本賣のまはまは代茶種ありてケントソバヤのま
まケントマと片の世はまはまのけんどん茶

野鳥見れをむらうりの人、謀むらへ持の石
とあらぬあけの下うか

聖子の白異國の賢者も秋の聖なる帝も終を
と、我のたれし初し畜を下と、偶ちあふ所を
原終の時又いりし身は從つて冥よりて心
より終、權を非をそぐりんあらや財宝の
いさばり、他のうた、吾をいひ、財宝をく
り、おきても身はかりて、後、手縁着属、衆のつ
り、何ひて世は笑種、あぬをま、記を君臣父子
夫婦兄弟朋友のあ、一き、中、欲は、あ、り、を、ひ、う
ま、く、あり、身、を、や、多、量、物、を、控、こ、あ、り、ま、り、川、の、り、
ハ、己、の、欲、は、多、量、の、り、つ、さ、己、の、ま、ぬ、く、難、路、の、

其のあつき火とおをれは、ま、か、り、を、終、の、さ、む、き、あ
ま、い、と、の、を、在、利、を、好、む、の、の、生、死、を、も、初、を、れ、を、欲
ふ、ゆ、ゆ、つ、い、初、を、智、ある、もの、を、ま、さ、あ、り、火、急、あ、る
時、の、權、お、か、う、海、の、の、終、の、權、ある、の、あ、れ、の、手、を
た、く、い、い、奪、り、あ、と、ひ、財、宝、を、み、あ、り、て、持、と、め
初、の、を、お、く、い、な、ま、り、あ、さ、り、あ、き、い、れ、あ、き、い、
め、終、の、の、あ、り、に、ま、り、ま、り、ま、り、あ、り、あ、り、あ、り、あ、り、
お、り、人、の、ま、つ、く、と、め、あ、る、あ、り、あ、り、あ、り、あ、り、あ、り、
た、く、ま、り、財、の、を、終、の、あ、り、あ、り、あ、り、あ、り、あ、り、あ、り、
あ、つ、め、い、る、人、の、財、の、久、し、から、終、の、あ、り、あ、り、あ、り、
天、向、の、り、め、は、草、木、の、を、中、階、袖、う、き、お、さ、む、り、後、か
さ、の、む、つ、し、を、し、と、か、ら、う、た、る、花、入、の、一、枝、二、意、い

船見の波をぬ日とわし身捨舟いさばうと朽を
てあむも浅ましいうなりんはく死ぬとあま人は
あさうひみぬれさあさうて世もさるものもかきこき
人のあま

何とあまの身も後をさるべし又拙者なり

○世の人情凡そ幸の強は弱れしは多し
一とし死地に入りて存すもの少く死の二つ一
の境かれ多く成就せしむる可しこれ佛家
といか一を不亂にして静くも思を潭にさるとい
程心力の極力たす可しあれ多く不幸は
てよむ(あま身とあま大時と臨んて存す存した
はせ七はと老をさるべし時を起るなり) 虎兇は入

ずんば虎を殺すやいや身と捨白の死地入りて
幸を薄くもあま有り人々多しやいなりあま
善につけ悪につけ多しあま存し遂げさる
とやあま(きんを死に顔くするあまはまてあくと
ありたき世の通達の人なり) 何よの業もてもあ
れ者サちやあませいと叶つと思ひ程のあまのあ
あらされ何するのうのあまらまのあま何れ
あれをさるに世の特を有るあれはして幸を
計る也と成ぬと大なるあまあまといけさるあま
あれあらし我國に在り人と今の太平に浴する
の民もたうのあまあま相中なるあまの甲代もて
いかに海大洋に漂流するあまのあまの話をさる

ぬきやある皆を為の一かよらむらうかと
五作くすかかたをたむ其の業を厚く務めず
欲病のそ汚され豊衣美食のそ厚くあらず
上の眞福をひこすりの神佛といのるか
の納更なるをきや奉を濟す人の精力神氣の別
は有餘あると思はる

○箱の奥の片里の大師の骨新の飯炊きも握いの
とあし教のいふつ有りりる鬼のたう十已上五三
たてもあつしあれを九寸の本具膳（あり人五握
りの上は白箸を一ツくたせし持佛は備あふれを
またまのめしと呼（りいありの謂れといふを知らぬ
その大望しお扱の家とよかくをるあつしお金と

往古の大晦
日七聖衆
シテテ報恩
經ニテ者皆
薄ニ往來スル
一六度アリ
七月國ヨリ
十二月晦日キ
時未レ正月
朔日知時飯
ルト見（テリ
和泉武部
歌の記
人の事
とげけと君
ひかし教住
宿やまか
の里
枕の草紙
まかつと
と源の
世月知人の食物は若くまを兼取の時代よかやせぬまありまはる人の隠筆や

知あきおの思ひをせり片をいりありんゆ知りす
中次第好法師の法則の尊とまむおぬしうつり
のハリトも物おと着れあれまはれりうの夜ま
あしおをりたまとも時をいすしおをりま著
かくぬぬ白くも羊の存法も白くもぬぬ知人の
今もねとま玉すのりまはりこの此都のあつしを
あつまのあしよまはれをりまもましとあつし
ありしがかくて照り示のりましまを細く作重
のめしあそあ存法りまやと思ひあつし四
五百羊のそ著の都まをせしとくの見（りま
溢觴の何ましと起りりまや知人の知りぬ
すすままぬし

敵して勝利を得るなり。みず殺すは非なる勝すもといふ
あり。後若神より見て倅り負て陣を引くといふ
手なせりあり。これ志法あり。相負て勝つといふ
とあり。ある意、寛大の所あり。勝て負くといふ
備候あり。ある勝たるやうに見るも負たる
あり。若し兵法のゆゑといふ所あり。これ軍の
幸のそあり。此片日世もまたあるの同じ。さういふ
業あり。この因より。若く他と度候の同じある事
と思つて元て幸の前後とあり。見たりて一途の遂
んとするの志厚く。必ず成るぬりあるよし。これ
則勝の理あり。然るにせりも。せいもといふ。これ
たふの。あり。ある意、負たるなり。太平の民は皆

此病あり。其病家畜養のあり。己をさし多きあり。
大負て勝つ。智者あり。ある先きの思を早く見き
りあり。勝て負る。馬假者あり。身の能を知ら
ず。先きの五手の利鈍を見分ける。た。其理押
は手前候の理居をいひ。誰か。これ識者の目よ
り。ある者。見たり。自身。十分。勝た
り。思ひ。さ。人あり。といふ。曲意。大敵の
宏量。遠大。ある。幸。今日。幸業の上。幸あり。
いと見。あり。ある。今日。幸業の上。幸あり。
と感。ある。ある。後。ある。あり。し。丁卯。季。夏。神。あり。これ
仲夏。再。あり。し。偏。述。す。

○昔蘭化先生予は若き時り此し。造化の恩を限るもあ
 ききり。而も致羅巴のや。入ル瑪泥亜といふ。大國の
 一七海を。教有まを隔り地より。其地の山中。又
 塩とあり。井泉あり。土人此れを汲み。煎煉して塩
 の製し。食用とあり。土海塩は異なり。此土産はよ
 り。く海を。よりの運轉を付す。して食用は。もとあり
 我邦の。よきと。海を環す。の島國。而も。此海。あり
 依濃國。而も。よきは。海を。よりの。管治の。運送の。運す
 と。許り。を。互。あ。せ。り。の。塩。いつ。の。如。く。思。ひ。ぬ。は。い
 ず。味。の。や。世。止。る。未。す。とい。ひ。たり。の。お。く。あ。り。と。其
 國人の。此。の。り。す。り。あ。り。し。思。ひ。合。せ。り。の。お。文。化。の
 を。一。め。我。邦。人の。魯。西。亞。より。歸。航。せ。し。の。り。の。語。を

は。く。は。吾。國。の。封。内。に。り。亦。多。く。山。塩。の。か。り。所。至。り。と
 土人。多。く。の。ま。ま。と。用。也。殊。に。止。白。里。とい。ふ。亦。此。の。也
 け。く。海。の。遠。し。陸。地。の。内。亦。の。塩。井。あり。と。其。用。を。亦
 才。經。歴。せ。し。途。中。に。多。一。地。の。足。て。り。と。此。を。其
 以。異。は。ま。ま。為。め。多。く。彼。廣。大。の。國。土。を。此。の。左。も
 あり。一。く。蘭。化。の。語。は。亦。思。ひ。合。せ。り。と。其。國。の。り
 本。邦。而。も。よ。の。あり。の。面。に。し。の。非。ず。り。と。思。ひ。合。せ。り
 志。ら。り。と。濱。海。石。岸。の。雲。根。志。後。編。卷。之。二。采。用。類。石
 鹽。四。十。八。石。塩。の。自。修。の。塩。あり。の。濱。海。國。山。田。郡。濱。元
 村。あり。の。遠。江。國。掛。川。の。近。海。の。り。を。又。其。在。序
 津。伊。の。郡。月。輪。庄。の。大。塩。の。里。とい。ふ。一。村。あり。の。大。山
 の。禁。り。し。し。海。の。り。を。り。り。と。其。遠。し。の。り。又。大。石。の。傍

○金養山中の水晶石とて三角の柱ありて圍柱を抱えり
 石の形を量り見たり云々ありと天を凌ぐ
 ところ見の詳に金養山の記に記す明石の麓
 なる處を思ひしと思ひし頃石亭の雲根
 為後編と見り加州金沢地味水物産ありと記
 せるに越中岡田の清うといふ所を二元と云ふ山と
 いふ所ありて高嶺ありて常の深まを雨ありて
 抄州の流罪を要する者を送るにすなりと
 河内又天柱石といふ大石も在る同く八圍に大
 夫の雲を貫て柱頂の多ぶるもの如くも終る巨
 大にして一本を立せり大石ありと
 怪石傳曰却化國中天竺之屬國也石柱高七十尺

○文圃水晶石の及至るもあらぬとけの深山の谷の
 間白高天の柱石ありて其の形を量り見たり
 かの傳記といふ荒年に見ゆる羊蹄山を
 家の庭人河内と逃れ居りて其の形を量り見たり
 といふ高天の柱石の形を量り見たりといふ
 事あり肥後女官の日記に似たり
 江州琵琶湖中の沖の石といふ所より形を
 白く長さ百丈と云付り水の中にあはれ
 たりと云ふ事あり
 大十指の石と云ふ事あり雲根志後編に見ゆ
 後のは法眼高室見林
 江戸においでし三月第を齋く家の元祖也慶
 長二年日本橋通二
 島天神の門ありといふ事あり
 所目と云ふ事あり

長... 凡二百十餘年又及

國... 見元

○城州愛宕郡 清水瀧

桓武天皇延暦十七年以真田村麻呂造清水孝

○秋... 此し細... 秋... 此し細... 秋... 此し細...

秋... 此し細... 秋... 此し細...

秋... 此し細... 秋... 此し細...

秋... 此し細... 秋... 此し細...

集醴早酒也

○露魚 丑絶句之一 花亭老人

劉說紛紛近代書未未投此老饒真莫嘆文字渾無味猶

是古人糟粕餘 笑罵極妙

○阿蘭陀 後漢西域傳奄蔡國改

○清夜錄范文正公鎮錢塘兵官皆被薦獨巡檢蘇麟不見

錄乃歎詩云近水樓臺先得月向陽花木易為春公即薦

之

李白贈韋長宰詩窺日畏銜山促酒喜得月王阮詩野曠

易得月谷虛帶帶烟 右見佩文齋韻府

○仙臺庵厨ノブ大ニ料理 一野布須間

生貝耳と取薄ク多ク湯とかけ乾し板 魚拵身子

付亭上 多拵身正付 取合も并を此西子三

芥類の内右名をじきき酒樽出鱈を入りく
せん

一せららるる

まらぬあひく 日ありまらぬまらぬ菜を入

一ケレくまらぬあひく 市の中は由は

三言中まらぬあひく ちりぬのまらぬ

まらぬ

○

鉤七杖箒之道也、鉤ハ曲也懸物者也又引来曰鉤昂カ
キナリセハ匙也又篋也説文所以用取飯去ニ杖岐枝
木也ニ夕ノサシタル枝木ナリ又収竹具ナリト見エレハ
楸筴竹把竹把ノ如キモノナリ箒ハ杓也ト註セリ水

注ヲ汲取ルモノニテ水杓鉄杓銅杓木杓ト見ユルナリ古人
此四種ノ文字熟用ノアリシナルヘシ乃コノ四物ヲ中西
氏草木虫石ニ辟言ヘシナリ胃ハ水缸ノ如シ水缸中ニ
一拳石ヲ投スルモノハ夫石ヲ去ント謀ルニ鉤七杖箒
ヲ用フルハ其道ニシテ即草木虫石ヲ與フベキノ術ナリ
邪ハ本ト胃中ニ収ムヘキモノニアラスシカレハコレヲ
祛キ去ルニハ草木虫石ヲ投スヘキナリ既去夫石則
水必減矣トハ祛夫邪則精必虚矣コノ時ニ當テハ鉤
七杖箒猶草木虫石ニ能ク加フル所ニアラス昂穀
肉果菜ヲ以テセサレハ其減シタル水ハ養ヒ加フル
能ワストイフト見ユ虚實全篇ヲ通讀メ自ラ分明
ナリ 右アル人ノ向ニ答フ

○ 說卦傳

觀變於陰陽而立卦。發揮於剛柔而生爻。和順於道德而理於義。窮理尽性。以至於命。

註和順。往各无所乖逆。統言之也。理謂隨事得其條理。析言之也。窮天下之理。尽人物之性。而合於天道。此聖人作易之極功也。

宋儒の窮理と主張し論を立る。此說卦借より出
る。窮るときは在り。此れ天地自然あるあり。き若の
窮理と之窮め人物の性と居りて。至天の及んば
一むといふ事。ときこの世は近き。西洋の学を窮
理を以ていひ。宋儒の窮理と稱せり。と
てあれ。あて。呼。これ彼國のチチエル

キレジケ、ウエーレンシカッブ。ハ人物の性を窮るの
ことあり。以て譬ハ人物の性。ハ眼ハ視ハ理耳ハ
聴ハの理といふ。むあり。ハあり。ハ眼ハ天造して
之膜三液を具して。此ハ觸ハ物内充透徹の物
ハ照映する。以て視ハといふ理あり。此ハ光ハ其
内景を剖。開き見。後其畜抱の理あるもの。と
知ハる。此ハ知ハる。ハ其自然の具。有るもの。而
而く。と見。窮め。多理を性。ハ。窮。ハ。眼ハ
看官より。視ハ。理あり。との。定ハる。あり。此
ハ真実證明の窮理あり。一身具帯の物を。知。多
窮ハる。皆。此ハ例。ハ。吾。獸。衆。象。亦。皆。窮。ハ。又
一草一本といふ。との。各國の天度と地の寒暖。ハ。皆。

○僧元政 日改家ハニ号ハ云々 續近世ハ詳アリ 後
深州ニ隱遁シ地を占めて瑞光寺と名く云々花
顛ある人乃ちと云々上人自身にかゝかんありて
書後日記のほしと云々有る多ク神身を思ひ
よれハニト云々あり

十三日書和哥懷紙 草帝ヲコレラヘルトテ紙ヲ折ル
一僧前ニ在リ其僧コレハ給リ候ハ折リ申サント
イフ予カ曰是モ修行ナリ心カラヒガクヌヤウリニ
スレハ口クニナルノミニアラズ心モ正シクナルナリ
手ヲ以テスルハ是ニカギラズ何事モウルハ心
カラヌモノナリ戸ノアケタテモ鳴ラヌヤウリニ心
ヲツケハキモノヲヌクモユガクヌヤウリニナルハ

見聞ノヨカラヌニアラズ心ヲオサメシタメナリ
見聞ノタメニナルハ甚シキ時ハニコトノ業ニモナルベ
キナリ心ノタメニナルハ只是佛道ノ因ナリ日夜ニ
ナス所善事トイハレサナガラ悪業トモナリサラ
ヌコトモ又功德善業トモナルナリ心ヲツクハキ
凡何事モ修業ニナラヌハナリ物ヲニツニスルハ皆
根本ニモトツカヌ故ナリ

○伴蒿溪曰其何と云々を云々聞ありハいと云々
他ハ云々云々徳乃剛ある人藤久長ト云々人百云
の妙手初と云々云々やと云々必相見を云々
橘氏の西東遊記云々云々云々云々云々
○茂實若あり時杉田大人の物語れと記し置るハ

白人も物と学ていさして思ひいりりも信らすといふべきか
やあるべきはこれの合議は似たれと其実の合議はあり
すもろこしを学ひて若其思ひいりりを書つけしや
やうな書きたさむのあり元法といふもの、松本を
を考へその様をまじ重きをまじりて一定の法とす
物の長きいかに何れをまじひといふ斬持の如し
され方なつておき法やある一記思ある人のありき
法ありある所見しよき法をまじりておし
世の中はかゝる記をまじりて記所取くもあり又思
あるをまじりてかゝる記を欺くもありかゝる記をまじりてか
ゝる記を欺くもありかゝる記を欺くもありかゝる記を欺くもありか
ゝる記を欺くもありかゝる記を欺くもありかゝる記を欺くもありか
ゝる記を欺くもありかゝる記を欺くもありかゝる記を欺くもありか

- 其餘の抜萃他日成すや下茂實廿二の時所
整はありたれ此原字中湯淺氏批評せるの
書見しより多時其三は像を為整漫派の中
に家し書し因るに今あるに再考す己卯の
の伊秋あり
- 何人の書か書抜あるに漢人と失たり吾人は
吾人の書き多あり此れありは載せ居あり
似くさひわおもひ定めてわりのらん
考のさうさゝかあり
- 中国描談と題する一巻を厚代輪記より見せ
られ若邦にて地球を撰りて在るといひやられ
たり撰りて此れを見れ

本邦大永元年 按ニハ西後柏原天皇ノ朝將軍義時
時ナリ文政二年己卯ニテ貳百九十四
年トシテ明世宗嘉 四月朔防州之行商宗設執于筆旌
暗四年ニアタル
杭州之市館とあり初條云ニ極共大寒運轉之軸南
北之石依所見云ニ一跡地球ヲ論スル極ヲ杜撰ノ粗
説ナリ取用フヘキモノニアラズ

○ 一生のうちにあまのあらまわりのうらんとまのまのい
つれまゝなるとよく思ひくらゐるて第一のまの
業し定まらぬ思ひ控へ一筆押を付し
一日のうちにあまのあらまわりのうらんとまのまのい
のまのあらまわりのうらんとまのまのいのまのあらまわりの
うらんとまのまのいのまのあらまわりのうらんとまのまのい
のまのあらまわりのうらんとまのまのいのまのあらまわりの
うらんとまのまのいのまのあらまわりのうらんとまのまのい

○
今いひ善如まの(善)い子
不見其換日尺之所
不見其換日尺之所
不見其換日尺之所

黄子あとして見る一聯を見たり中聯句何人の
作や唐和纂要に見ゆといふ
心許二説

○

羽倉村系

春満阿多万磨と云ふ

姓、荷田裔稱羽倉を氏とも若南稻倉の祠多
才と云として自ら國家の復古を任とす神代卷万
葉集よりおのゝ家業を成せり神代卷万葉集
れすも元録年間、諸を懐古の運是は後世をありたりた
時より七國業を唱ふ、神代卷中々國あり

因名之進

在滿 春満乃祖也

因しく國業を唱ふ大嘗唐具釋因使家業と著
す年代表実の行るよりよりして其考索の明ある
ゆありはれぬこそ國業より其の君子は
しるはあり 福を禱して考索在教授して終る
其子御凡

通名 東飛家業を嗣て江府あり 女弟

民あ

又右文を好む身をもよみく因しく教授す

島刺

姓也 茂縣主

因部流と名を託はしめ、云枝といへり遠州濱松の
人春満は後の家僕のとくして京師に學ぶと云ふ
り家業より江府より下り大に古家業唱ふ春満云と
云洲子及びてはしめて万葉の風とよみらば文
系の中又右文を好む身をもよみく因しく教授す
と云ふは從ひ家業より多しその説は神代卷万
葉集といふこと極にくさぬ移りて是よりして
知しけり 大人 春満阿多万磨のよりありぬる 亦

鳴乎大丈夫當其時必也垂切名旌千載之下堂
可與算亦同朽哉

此の在奇万葉集やふかしのといふを廿三比才の時
同難伊勢の辻在二帝と云ふは少く数年の辰集
中と捜索して第十九卷は好くいふく惜支と
屬もの初とおわなれは代証買のまき書と
乞ひて一軸とあしきかぬぬまを七九乃葉の伊
程病やまごりまはけ切まをま述の奇は古まとは
羞の所あるまや

○大坂物語といふ印本二巻粟本落洲より借し
うれたるはあは大坂在夏序傳にて落洲といふ天下
靜海市一統あは連しその紀事あり寛文十

二壬子の板より七敷段を三在馬まはは板は大坂落

陣元和元年より寛文十二年まで廿八年とあり明

三江戸大火の場文政二年己卯より百四十八年なる

段十の年あり原出米より記すは既ありは板印世上は流布し漫滅

一在日後元鑑七年在大坂の書肆吉原本右門再刊

行せり本をみよは本と同じ但馬の井物語の書はら

物此のきやうありありは在人形右近ありは後享保

二のころ而も本は板行はといふは後かく純板の

禁ありし世は公も在るあり何とを考ふにけきなる

や白し今世も絶たれし家室とすしけきなる

頭階より落海市日一枚摺の繪奇幻帳に在り

一頭三千七百裁前少將 一百松平院前書

一同

廿五

松平陸奥書

以下略

數十人の名あり

（五名首級一万石ありとある也とあり）

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

磐水先生隨筆卷之十六

○消遣隨筆第參

高溪曰並河天民緯亮字瀧亮昂通君と云誠所五一永
崇字永父仁廟門人五畿内志の弟城南島羽振大後
の作者後伊豆三島に住す
の人自丹波と書るハ其本國在為人膽才才秀比
すく支類あり國業とのを信する人〜の〜を記
あり國文由海より元はあり此を又と左に掲ぐ

かゝるをき此記

七尺じつりにあはれりたる日本初いつをあくらの足
乃かゝるはあゝのに打ちあてて神社のまゝあり
牛の角をい〜たう〜やりのまゝ七のものを

かくては根ぬいひはつち乃ちをぬしあら
も争初て雨戸移粟にくちけつきくやまのこを
ゆふみしつあれはうあらは是をどおくむかし
ゆさつあつるものなかくても何うはつ松皮いんげいを
うばつても程をのくこちをのこしてウ川を木と
いひしむことばこれらもあつたぬ事いこと
あつち本といふものもあつたあれうま事
ゆや室基本記といふあつたあつた智義
あつちをいふはドめて内分のあつた内を
あつた陰陽乃のこちをこれこなるあつた何れ
のあつたことつとを記すもあつた多の事
さつ何のぬきともきこえたらはこちあつた

根、先母系とする本をひびきみあつた室おちぐこの
本を授てしつあつたをいふ田舎人は金華の本といふ
日本ううちあつたをいふ手記書をあつた佛記を
うむた似れむらくは存産くのまやしまはこの本の
あつたを切つたをいふ(調りあつた)たの代
そのあつたをいふ(調りあつた)たの代
是ゆあつたをいふ(調りあつた)たの代
あつたをいふ(調りあつた)たの代
皮あけるまも神の秘まは本をいふ(調りあつた)たの代
まよりこつたのぼりりかくてあつたをいふ(調りあつた)たの代
たをいふ(調りあつた)たの代
根ことばをいふ(調りあつた)たの代

やうありしれど中臣の孫は皇極の事しきたる
千本音知し三つの中ありつは侍ととい(白の皇
居のいりおもゆと事やわよきよ)お作りたせりま
ていつくし交さぬを切交つらぬ事。辭とも
皇極の事しきたる。たこの皇極の事や。あまのまされ
り所きおま事そのはく事。皇極の事はきよらり
のひきもをぞおす。よらりの金幣。比事。あきり
そり(ま)して。皇極の事。よらりの。たらん。田舎
の里。むらぬ。たの山。乃。は。や。ぶ。く。ま。り。本。も
竹。ぞ。あ。ど。ま。り。む。り。金。幣。を。古。交。む。あ。能。事。ご
も。や。う。乃。相。り。り。ち。ま。相。ひ。ひ。て。む。り。あ。ひ。病
つ。れ。常。白。か。こ。お。あ。ど。を。木。入。皇。極。の。事。の。皇

根のやうにをいりてり何んを千本の金幣の本の末
をあぬしたるすが。ちりんといんり。海。き。き。事
よのいび。ご。く。や。竹。らん。移。べ。あ。り。こ。ご。の。り。こ。ご。
竹。り。め。さ。れ。ど。う。や。う。事。の。か。く。こ。ち。あ。ひ。ま。ぬ。節
あ。れ。び。ひ。て。も。こ。ご。ら。ん。や。ま。ぬ。正。徳。三。年。を。月
七。り。お。系。の。水。あ。る。岩。屋。山。見。ま。海。り。け。る。道。は。雲
か。は。こ。ご。の。山。里。を。返。ぬ。ま。こ。ご。お。く。海。の。事。の。事。
千。本。さ。り。揚。ご。ら。と。見。つ。け。ぬ。あ。や。の。事。は。是。は
神。の。社。ま。す。あ。る。相。を。り。く。む。事。の。り。ら。ぬ。事。は。侍
う。ら。た。ら。ぬ。事。も。竹。り。あ。り。や。う。れ。世。う。ら
ま。尾。山。里。あ。ど。の。古。交。も。て。は。し。て。種。野。あ。り
い。ひ。ま。け。む。事。の。遠。交。む。り。あ。り。と。ん。園。の。皇

伴こあどソひんたぐひの孫のばあさまおれど
あふおかしおおえしうことある嘉作して住ある
おこまとおくあせにおもひおにありまゆくして田
するをのこまとこれおれおれおき里人の家
居る侍るといおあのをの本の神の神よこそするを
りおこと有りしをありめと様とくお白とわいり
はらうもわいりすう様も侍りなれらるるも
何やうおくまよおめ侍らば是すううく入候も
いびおんいばれらあのをやうお本お家や侍らん
おねお侍ごとも侍らうかとしてすきおうやうを
あつらひらめきこえはむつらしおとひごともは
りだちうるあり山里人のかこくお、おくおある

入候まうに見番はげまゆいと何やうあるおせは
久よ意ぬりおしつるあぢや海をり大かすお
とど様をる様とすうあんとおつらとたは
いあまおあひぬりおきりおわけて道のか
へまやまお爪本お折るお見も是はあぢび
とやいおあどいひすうもあくもよお折るし
おあのおめするとにくとお人はおあを
おもおあ侍るおお様もいひおあも
七候の侍るおおおの侍るおめとし侍るお
ど風おづく吹くおあら大のうお
お吹くおあはくおおおおおおお
おおらおおおおらおおおおおお

と持ていぬこの本乃而此棟より方海にぐれるすが
の人乃肩お物をとつてさぬお似の意をわける本と
かいつたは西てもあつたぬうりたおとりのやうの物を
うつと本といひてち本をばをぎととあてかほつ本
をといひてあつた本をわける本といひてわつうぎ
といひてあつたあつてといひてや一と也伊豫の國を海か
うも熊山といひぬまいつりぬ移山といひて七八里ば
かいつたあつた入もわくあつた僧共海の住より岩を
山海をより存在かあやていづくごうりたまは
山あつたあつて馬を借つてのる比日つたあつた
を乃こまといひてはあつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

とていぬこの本乃而此棟より方海にぐれるすが
の人乃肩お物をとつてさぬお似の意をわける本と
かいつたは西てもあつたぬうりたおとりのやうの物を
うつと本といひてち本をばをぎととあてかほつ本
をといひてあつた本をわける本といひてわつうぎ
といひてあつたあつてといひてや一と也伊豫の國を海か
うも熊山といひぬまいつりぬ移山といひて七八里ば
かいつたあつた入もわくあつた僧共海の住より岩を
山海をより存在かあやていづくごうりたまは
山あつたあつて馬を借つてのる比日つたあつた
を乃こまといひてはあつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

とうまはなよゆいめくとよばうーらをとめるはらうば
ことろわわともきすとといめとらやあるといふ
はひもすうげ後りたといめ何ともぎんよといか
名をあらぬ國のありけるよとよめあふく皆
とらよさかにも身系紙よはこつとといめとをあや
まりとくつせといめあつ皆毒の生れりりあど
いめ身をそとくうとといめ知ぬかめこつとといめ
い木のこ乃やううとよ某の毒のうらにありといば
とよとをこめくばはる此こりて毒とらあがはさ
きすうちありとらたきうれもひより侍る千本と
いめゆとこつとの人あましくわんせ何つとひきこえ
んよ是の海さうき船をばはひと知侍りあり

いめくか田舎の山里をさうい知とらぬ
れが火て田舎よととあといめか切うやうのこ
とあても雲が畑といめ系と三里をりめ
いして愛宕の群の種うた乃山里法白の群
谷川いときよくあがれをり香魚を貢として供
御り献るを

○仙臺の人の身ある者一人とく「まふも似す
左のあつましと思ひ」と意ある能く存せ
と考へて「イトヨ」あつとといめあれ名義ある
産し者一戦傷等とくびとつと武士の名義
とせよ又「木」柄もて名義を指し物りあり

○ 鳥卵

走那入弁 本朝云爾蓋鳥ハ日也卵東方也猶言日東
見于善無畏碑

○ 梵曆

梵曆ヲ推考ス（キ）經論

日藏經 月藏經 文珠儀軌經 摩登伽經

舍頭諫經 立世阿毘曇論 宿曜經 正法念經

起世經 禰炭經 紀世因本經 長阿含經

新舊婆娑俱舍

最梵曆ノ深理ヲ見ル（キ）者ハ

立世論ノ日月行品 日藏經 星宿品

唐ニ印度ヨリ將來スル所

瞿曇氏曆 加葉氏曆 僧俱摩羅曆 考威曆
金俱叱ノ七曜曆

○ 西山拙齋戲作

不依ガもとふたうもかりおとと

をあらゝるゝゆわりのもどろく

○ 乳母 谷川淡齋和訓禁

○ あり、任信、隨從をよめり見らまゝまゝ、是こ

海りまの義こ。見女子飯をまゝといかかうむく

の畧こ。是利のあらゝりまをハ元をハ見の語まゝ

とつり。○ 乳母の名をまゝとひり奉 源氏枕を

紙東鑑ると見くつりめのとの義なをりこ

れ、縫母の義は同じきや屋強の人の片も同じ

冠山老彦曰因州ウチノ今由乳母の事とまるといふ
西方の種は乳を *MAMMA* といふ小児の種は
話して暗合といふ(一)又ニムラエシムム母デル
正註セリ *bozet, mam, pram,* トアリ。乳母ハミン子
ムーデルといふ

○

硝子 ビイトロ
吠茄哩耶 ビイトロ 枕詩

羅向 ヒトリム。ニ似たり。ビイトロハヒトリムハの轉ニ

○

僧祇律 蘊毘勒 麦酒 和蘭のビールニ似たり

○

シヤウフ
コムギノ滓ヲ麥麩ト云カラコ一名モミヂ フスニ
江戸今食用ノ麩ハ漢名麩筋ト云フコシハ麩ト麩

時珍曰麩乃麥皮也

トラ合セフニテ造ル 花明時珍曰麩筋以麩與麩麵ヲ和

此時ノ水ヲ飛ノ粉ヲトリタルヲ麥粉ト云 花明時珍

是麩洗舂澄俗名小粉即漢名ナリ 花明 出 一名小

麥粉 本草 漿粉 本草 葉言 茂實 按ニ俗名ニヤウフ

方書ニ麥粉ト云フハ皆小粉ナリ

○

勸學院鳩吟サカサ 蒙求

兼山先生曰蒙求之麩。其在鎌倉氏以來乎僧兼好之品

古書不取蒙求其書中引孫晨之事則讀則讀焉雖則

讀之亦不好 豈以爾時非菰苑所尚乎蓋古昔

皇朝之盛天子及諸姓之學以此課童蒙云故今俗尚傳

勸學院鳩吟蒙求之諺其為朝莫誦習可以見已云

未標顯刻スル亭ニ見(タリ)

○寺

事物紀原曰漢明帝時撰摩騰自西域白馬馱經來初止
鴻臚寺遂取名浮屠皆寺○第世四代推古天皇二年春
二月丙寅朔——諸臣連等各為君親之恩競造佛
舍即所謂寺焉 寺トイフ訓ハ韓語ノニ、ナリト諸君
ニ見ヘタリ

○サリガニ

シサリカニノ略語ナリ

拉姑一名哈食馬 清高士奇一名喇姑 盛涼此物西蝦夷

地々ヒシツンベニテ捕ル東医室鑑曰石蟹与螃蟹不同

形且小其黃附久不合疽瘡螃蟹横行石蟹還行此亦一

異生溪洞中 右澹洲夷譜 茂質按拉姑哈食馬ハ北

韃地方ノ名ノ音記通志ノ喇姑其音記名ニ因テ字ラ

製セシト思ワル

○孫太郎夷 川田郡才川産

○九香夷ノ一種ナリ 石蚕又一名石下新婦

○海鼠

和訓奈末古本艸綱目不載之馮時可兩航雜錄ニ載ス
ル所ノ沙噯ナリ一名沙蒜寧波府志亦載之五雜俎一
名海男子菜性纂要海蛆温州府志金笥蟬史泥一名沙
噯 諸物異名疏亦同

○東海夫人

異奥圖讚東海夫人淡菜云々長崎ニテカレセカイ乾隆
帝ヨリ朝鮮エ有命ニテ當時海稅ノ内此品ト銘海參
ニ三品進貢ノヨシ尤美味功能モ多キ由北地ニテ專

ラ貴ヒソコ由 同宮林藏昏臆

淡菜

蘭書曰淡菜一名殼菜、異魚圖譜曰東海夫人淡菜有殼形雖不典而益惟薄、求以象類、堪為大噓。○達按スルニ淡菜俗ニイノ貝ト呼フ北國ニテイ貝ト呼フ毛貝、凡云フ藝州廣島ニテ瀬戸貝ト呼フ形婦人ノ陰戸ニ似タリ殼黒シメ厚ク左右ニ毛有リ肉赤色味美也淡菜ヲミルシヒトスルハ誤也淡菜肉中ニ珠アリ即チ尾張真珠是也 右松岡玄達怡顏翁介品ノ説

○満語 キヤウシ 鷹 オウサシ 紙

○オイドウ 乞食非人の事を仙臺封内ニテいぬる凡ハ庭訓傳來ニ乞食陪道オイドウあり但陪道ハ出所

ハ未考（す）備前ノオイドウト唱メ白由

○子ヲ生ス 産落 仙臺 方言 紀州ニテモナストイフ

○他國ニテハ多ハ産ムトイフニナサヌナカトハ古来イフイナレハナスモウケモ同シトニテ昂生オウシナリ怪ハニ足ラス

○仙臺東山千厩ニ作ル馬ノサレガイハ其芽ヲ濁酒ノ渣ニテサラストイフソレ故酒造停止ノ年モ同處ノ之免許トイフ其製造未タ詳ニセヌ此村ハ秀衡ノ既ヲ置キシ地トハ申傳ルナリ

○種石蓮子説

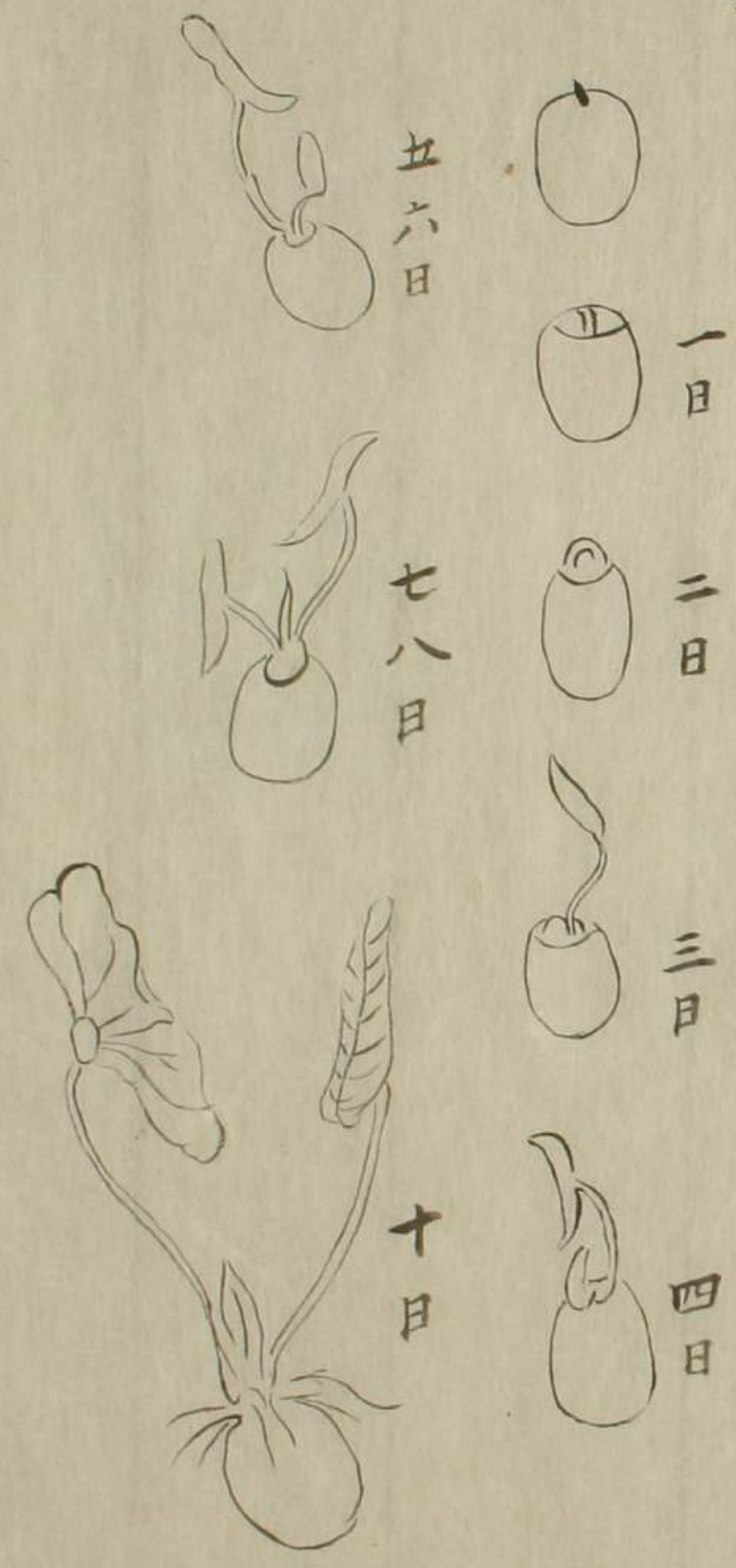
夫蓮ハ淤泥ニ産シテ泥ニ不添水中ニ居テ水不没根莖花實其品ヲ同シフセズ清淨清用シテ群美ヲ兼得タ

ルナリ餘之草木ト遠蓮節之始ヨリ根葉ヲ具シタル
一赤子之胎中ニ支體ヲ全具シタル如シ節之生スル
房殼ニ跌着セシ処ヨリ葉莖ヲ倒生ス外物ニ懸隔ス
藝家又好事者流秋收之子ヲ採翌年ノ春分種ヲ下ス
故兩年ヲ歷三年目ナラテハ花ヲ不生ト今考フルニ六月
接收シ子直ニ水中へ浸シ芽出テ培養ヲヨクセハ七
月之末ニハ五葉モ可生今年七月中元錦邊之節子ヲ採
其日下種セシニ十五日ヲ歷テ生育セルト下ニ圖スル
如シ五十日ヲモ歷レハ藕心拊指大ニモナル(シ各ニ
至リ暖カナル唐窖^{ハコ}ナトニ圍ヒ置ハ来春子發芽ハ春
種之年年余ヲ經シニモ一サル(シ培養イヨク丰收ナク
セハ其年花實モ可生道理也况ヤ翌年ヲ過レハ花

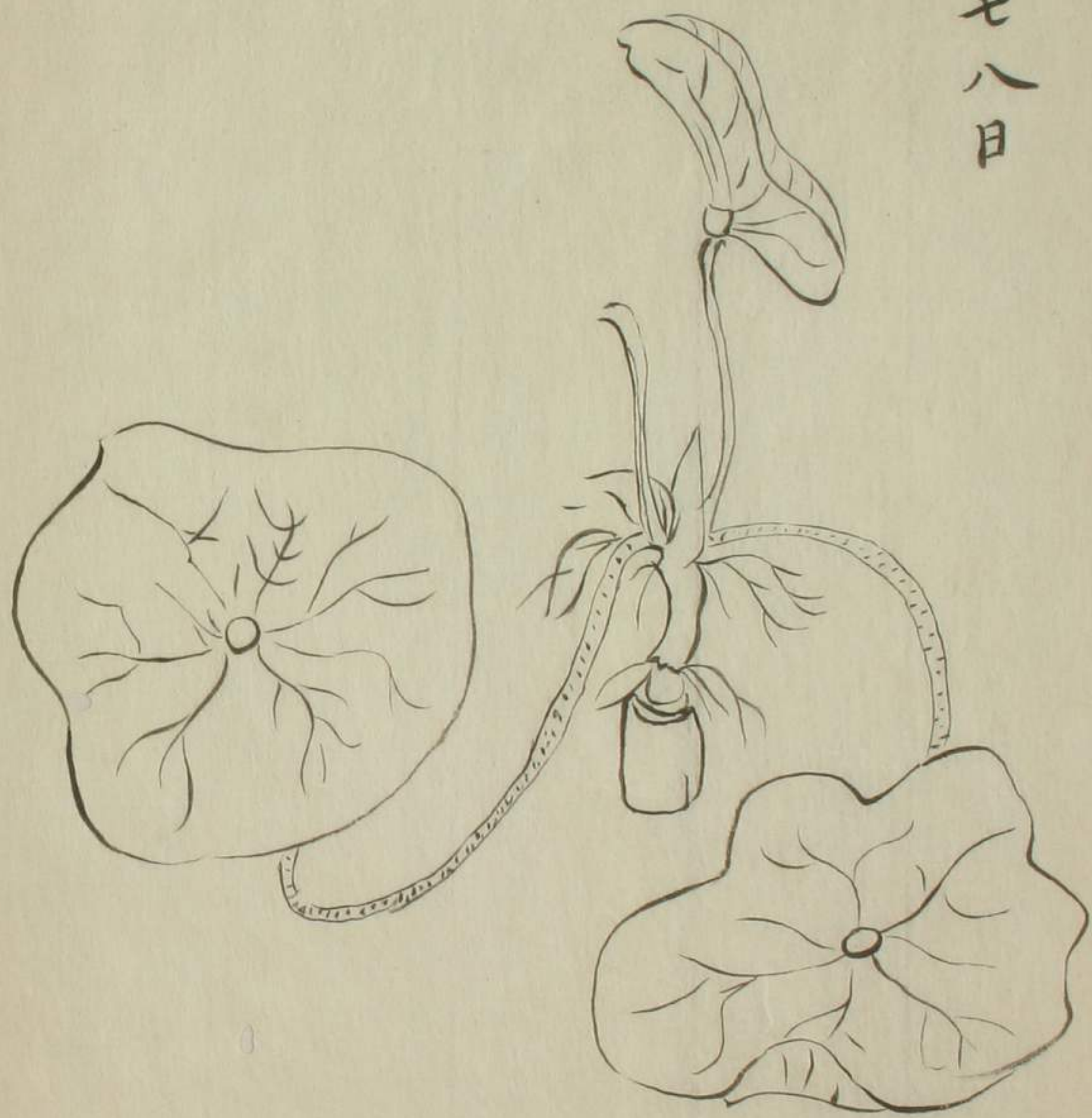
十分アルヘキ也春種二月彼岸比ナレハ餘寒之氣モ不
夏種之子トハ生立様モ甚可遲其冬ニ至リ漸夏種之
年ハカリノ者ト同シカルヘシ因是テ六月初收之子直ニ
水中へ投シ芽ヲ出サセナバ翌年初秋ニナリ花モ可生
ト思ハル也節實水中へ浸シ又泥へ移シテヨリ烈日ニ
曝スベシ陰地ニ置ヘカラス盆中終日暑天炎風ニア
タリテ日煎之如クナル水ナレハ同日同時ニ下種セシ
者モ日ヲ隔テ生セシ如ク也 補ハ月ニ入テ下種セ
サレハ天然造化之理感スルニ餘アリ又始清水ニヒササ
ス不淨水ニ浸セシ者ハ青心出タルニイツトナク白肉
ヨリ腐爛スルモノ也又千葉者不結實ト集解ニ云シハ
時珍之傳へ誤ナリ今千葉重葉之蓮節萬葉蓮為葉

蓮西湖蓮之類實入コトニヨクシテ然モ生シ易シ
 備蓮子之形状區別アリ予別ニ蒞譜ヲ作ル因テコニ
 不贅于時文改辛巳蘭秋晦日芝陽貞軒小錄
 群芳譜種蓮子條云八九月取堅黑蓮子尾上磨尖頭
 令皮薄取堊土作熟泥三指長令蒂頭泥多而重磨頭
 泥少而尖種時擲至池中重頭向下自能周正薄皮在
 上易生教日即出不磨者率不可生又一法用雞子一
 枚開一小孔去青黃將蓮子填滿紙糊孔三四層令雞
 抱之候小雞出取放煖處不拘時用天門冬末硫黃同
 肥泥或酒鐸泥安盆底栽之仍用酒和水澆勿令乾自
 然生葉開花如錢可愛蓮子磨薄尖頭浸靛缸中明年
 取種開青蓮花蓮畏桐油忌之 此說古來ヨリ傳タル

説ナレト迂濶甚シ蓮子尾上ニテ磨シタリ凡肉上ニテ
 研去レサレハ速ニ不生蓮子殼腐ラサレハ不生コトニ端
 池中ハ拋擲セハ中ニ生シ難カルベシ予カ不信トフ也



十七八日



○日本地上一度

二十八里二分

伊能忠敬実測ニ定ル所ノ確教ニ

但尺ハ曲尺ヲ用ユニハ尺ヲ一間トシ六寸間ヲ所トシ
三十六所ヲ一里トス

獨ニ都一度

一十五里
コノ一里ハ日本ノ一里ハ分八厘ニアル故ニドイツ
ノ若干里ハ一ハ八ラカシレハ日本ノ里教トナルナリ

拂部祭一度

大里二十里

コノ大里一里ハ日本里ノ一里四分一厘ニ
アタル未法上ニ同シ

常里二十五里

コノ常里ノ一里ハ日本里ノ一里一分
二厘八毛ニアタルナリ

小里三十里

コノ小里ハ日本ノ九分四厘ニアタル
ナリコノ九分四厘ハ一里ニ足ラサルモノ
ニテ所教ニ直シテ三十三所五十間ニ
尺四寸トナルナリ

諸厄里亞一度

七十里

コノ一里ハ日本里ノ四分二毛八五七有奇ニ
アタル未法上ニ同シ

右何意ゆ一里以下ハ小教ヲ所教ニ並一ハニモ并
盤ハ甚敷テ並三ナリ所ヲウケ何ナ何所ハ何
何ナと出ル何ナ何ナヲ五ノケハ何ハ六ナリ
カケ又何ナ何ナハ何何ニと成ル又何ナ何ナ
ヲ五ナリハ何ハ六ナリカケルハ何ハ何ナと出ル
三ナリ何ナ何ナ何ナ何ナ何ナ何ナ何ナ何ナ

○時珍曰遍桃出南蠻形遍肉洪核状如盒其仁甘美番人
珍之名波淡樹之甚高大

○南蠻志曰偏桃出波斯國彼呼為婆淡對三月開白花結
實如桃子而形偏故曰偏桃肉苦洪不可啖核中仁耕西
域諸國並珍之

○果譜曰巴旦杏一名八丹杏出回之地今諸處皆有樹如
杏而葉差小實小而肉薄核如梅皮薄而仁清耳鮮者尤
脆美稱果之美者

○按巴旦杏蠻名亞曼獨尔俗稱亞門菑蓋蠻語轉訛也
近未傳種從琉球壽星桃亦俗稱亞門菑不可混
月池類抄所収

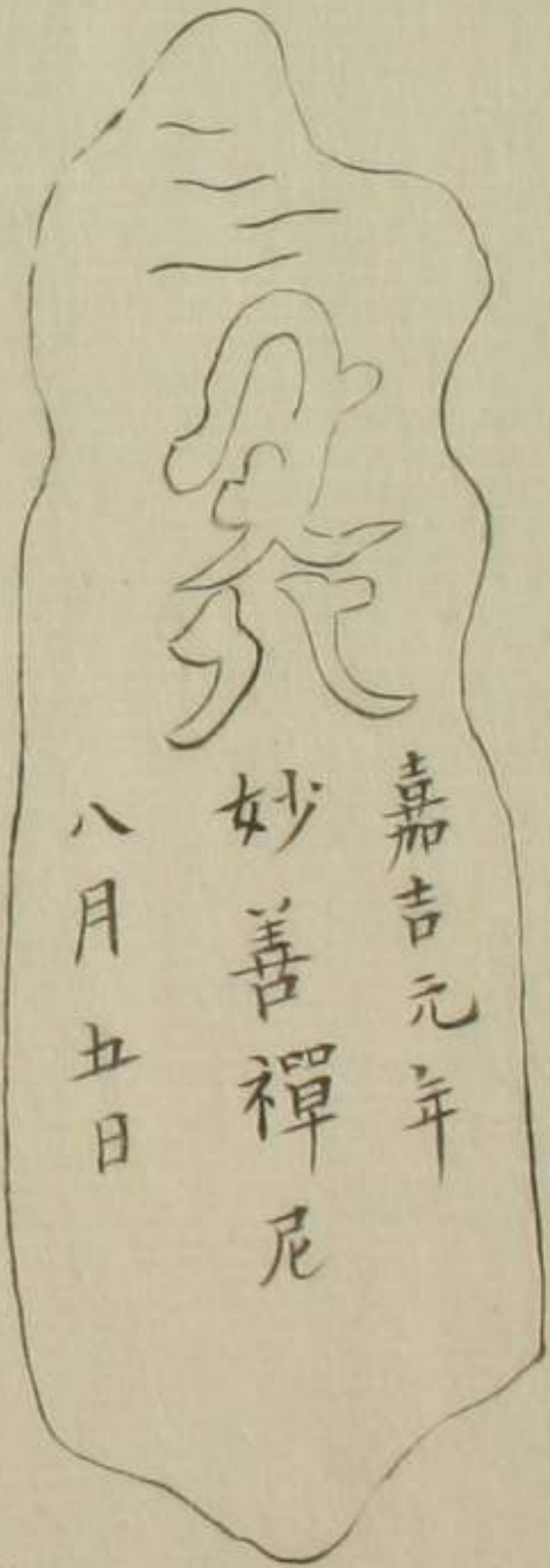
庚辰冬十一月 桂國草拜書

○牛部有の失火リ又類燒ニ及ル有る者ナリ牛ハ火中ニ
在リて駭ルカキても変る途カキテハ廠ニ卧シ居テ
動ルぬ事ナリ有リ既ニ文政三四年の事有るは芝牛所
ニ七牛部有燒ル有る者ナリ其時ハ如何ナリても或ハ

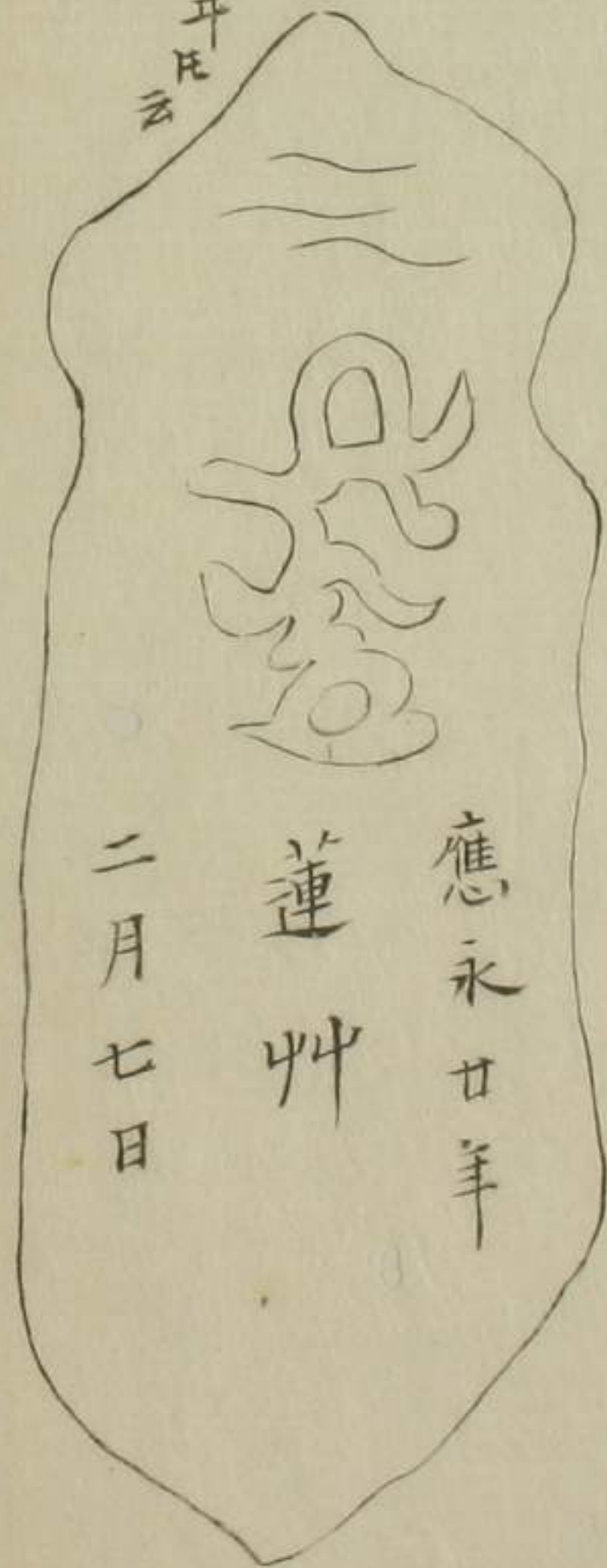
同
四百八十三年成



同
三百八十一年成
或三百四十三年云



同
四百九年成
或三百八十四年云



○太平日久、諸民奢位を極め、百年の先
より、識者の出づるを時、初め慨きて、
多し、以て奢るを年比し、又、
その世に増長の極ともいふ、
るより、世一変せし、止む已むとあるまじき、
の時、ハ年々の、物、は、嬉、好、す、人、さ、る、も、
調度、飲食、おのり、多、か、た、厭、厭、は、
ハ、多、用、を、此、は、是、ぞ、と、
ハ、を、用、の、微、う、す、く、
可、を、得、る、も、の、物、あり、と、
人、嘉、保、年、百、又、述、る、
續、後、種、葛、と、
見、る、

餘ぬ々味塩汁をそへて焙させやあつくまこく人々
 あり我場より程七里米飯を焙計りて焙させや仕
 くせ左の端の片時の武家の下人たるはまこくは米飯を
 煮りけつき籠り入る味塩汁を焙させやあつく
 てはみ叶ことくまこくは身有るもあつくは米飯を
 く汁の味奇きし而とも福するは華あつくはみこ
 けん

○ソきあは雪見はあ後娘所とていふ不くは
 芭蕉の飛あうといふ人々は膳灸を日所ありあは
 此よいつの望しいつ地よして作しきとて知ら
 ず屋州也者 横井氏時般又並明又頃寧後又暮水
 屋を藤原屋を半掃院藤原の世

の鶴在といふ書の内容續編は初七一見り

印
 言井凡月ときき
 と名もやさしくさ
 あり一五等をや
 吾の傳出とれ
 毛也印
 いさ出む
 松交みよ
 ころか抑
 丁卯録月神
 夕道何りよ
 送了

縦九寸五分平横一尺四寸
 今横拍の一軸とれ
 是貞享四年丁卯冬のころあり
 今年明八年戊申より百二年あり
 夕道ハ今の凡月書録即ちある
 祖父とてあり也集の作者あり
 六井曰凡月書ハ右府平所書林あり
 中家ハ芭蕉の所折御の伝まはるれ一白
 を跡きれ一書録を序あり又撰写す

風月堂を訪ひくむりし翁の才家ハ五残の伝

一軸と見らるる啓あるの何れ紙巻を讀む一白をてむ

身の終りや吾の足あと見ぬ世々也

也者

此れよりして其書讀む所より世の良き
ありはとりの端りなりとあるはあれども
是ははいさしむとありて其書一やあるを
ま可くは目より好れぬ事ばあしうつし
とめぬ

又故三ツのとしし庚辰臘月の神

○飢歲下築

兩足山七年考寶永戊子奥州飢饉の年昔

肯山公新の選築せられし由未の功は日履法
の是りせりといふれ飢民を救はれり此の
ありと義徳の功なり。續産種集を讀むと天正
年中の事ありて此の由は其の由は不作は
穀の要所を並に開き以て移す者なり飢は
新に食ふとも相多かる。是れ新穀拂戻の時
在人の救ひ施すものありて在りて倒れ
果つ者限りも無しとあり。故に豊臣秀吉公の
此の時ありて若くは海傍の地は川桂川等の
皆後をてりて土砂が積るに地盤の不安なり。是
を何くも其の由を飢饉の形を極めしむる
公の職の功のよく成り智の人なり是れ天下統一統

か時子も多しは存諸國の弟教筆送の事此を
子能てハ力及多し有るを非かく多きの物ハ
て飢饉を救むるやハと云ふ
肯山公の飢饉を救むる大刺を新の送立何
全七條のハ豊公の故智を有り強く致すとい
才智ある人の男ハ一揆を成す可し

○木蘭辭 木蘭不知名許作

唧々復唧々 何一作促織 木蘭當戶織。不聞機杼聲。唯聞女
嘆息。問女何所思。問女何所憶。女亦無所思。女亦無所憶。
昨夜見軍帖。可汗大點兵。軍書十二卷。卷卷有爺名。阿爺
無大兒。木蘭無長兄。願為市鞍馬。從此替爺征。東市買駿

馬。西市買鞍韉。南市買轡頭。北市買長鞭。且一作朝辭爺娘

去。暮宿黃河邊。不聞爺娘喚女聲。但聞黃河流。水鳴澌澌。

旦辭黃河去。暮至一作宿黑山頭。不聞爺娘喚女聲。但聞燕

山胡騎鳴啾啾。萬里赴戎機。關山度若飛。朔氣傳金柝。寒

光照鐵衣。將軍百戰死。壯士十年歸。來見天子。天子坐

明堂。策勳十二轉。賞賜百千強。可汗問所欲。木蘭不用尚

書郎。一作欲與木蘭賞願馳千里足。一作願借明送兒還

故鄉。爺娘聞女來。出郭相扶將。阿妹聞姊來。當戶理紅粧。

小弟聞姊來。磨刀霍霍向豬羊。開我東閣門。坐我西閣牀。

脫我戰時袍。著我舊時裳。當牕理雲鬢。挂鏡貼花黃。出門

看火伴。皆一作始驚惶。同行十二年。不知木蘭是女郎。

雄兔脚撲朔。雌兔眼迷離。雙一作兩兔傍地走。安能辨我是

直譯

右ノ如シ翻スル事ナレバ一言一物ニ就テイフ名目ナリ
只一事一物ニテ

カラヘ 譯云筆 キチ夕 譯云女人

コレ直譯ナリ 文章ノ上ニテハ逆モ直譯ノミニテハ
足ラサルニ依テ直譯義譯ナクテ文章ヲ譯スルヲ

翻譯ト云フ

義譯

ソイニテ 最清淨之義ナレバ對反ノ無垢ト記シ

ニ一ナ 東國ノ名ナレバ漢地ト記ス 此類意ヲ取テ

翻スルヲイフ

對譯

十一 曩謨

ワジテ 轉日囉合ニ

十二 摩尼

ト對音ノ譯スル所謂音譯ナリ

對注モコレニ同シク梵文ノ音ヲ漢字ニテ假字ツケシ

タルヲ云フイニレカレバコレヲ翻トハ言ワスコレ梵

語ノ一ナル故ナリ

彼方ニ有テ東方ニ無キ類ハ記ト言ハスノ直ニ梵語ト

イフ而レバ莫クハ對音ナリ 閻浮樹 阿育樹ノ類

彼ニ有テ此ニ無キモノ始終梵語ノ一ヲ存スルナリ

瑠璃頗梨琵琶ノ類モ西域ノ名ヲ傳フルノミコレハ翻

トモ記トモ言ハガルト同事ナリ

行智上人曰譯語ノ名目ナレ關スル如シナレバ亦乃伊

底野迦ノ類直ニ其物ノ名トノ通稱スルト覺ユ彼

